

平和への誓い

「生きたい、そして、みんなと幸せに暮らしたい」

そんな願いもむなしく12歳の少女が亡くなりました。

2歳で被爆し、12歳で突然原爆症と診断された佐々木禎子さんは、入院生活を送りながら「生きる」ために、最期まで望みを捨てず、願いをこめてただひたすら鶴を折り続けたそうです。

59年前の8月6日の朝も、川と緑に囲まれた広島街には、人々の変わらぬ生活がありました。戦争中とはいえ、それまでと変わらない夏の朝でした。

しかし、一発の原子爆弾は、そんな朝を人類が忘れることができない朝に変えてしまったのです。

熱線、爆風、放射線などにより、その年の末までに14万人もの人々が亡くなっていました。そして、その後も放射線による障害により、多くの人々が苦しみ、命を失ってしまいました。

佐々木禎子さんもその一人です。

わたしたち広島の子どもは、毎年夏が近づくと、禎子さんの意思を受け継ぎ、世界の人々が幸せに暮らせることを願って鶴を折っています。

しかし、いまだに世界のどこかで戦争が行なわれています。

多くの人たちが日々恐怖に脅え、苦しみ、命を奪われています。

無数に埋められた地雷によって、多くの人々が傷ついています。

子どもたちまでもが武器を持たされ、戦いにかり立てられています。

そして、広島を焼き尽くした核兵器は、いまだに世界に存在しているのです。

戦争が生み出した悲しみは、憎しみを呼び、その憎しみがさらに深い悲しみを呼びます。

しかし、私たちが聴いた被爆者の方々の話は、憎しみではなく「こんな思いを、もう二度と誰もしてほしくない。」という強い願いに満ちています。

私たちは、この被爆者の方々の願いを私たちの願いとし、平和な世界をつくる努力をしていかなければなりません。

ここ平和記念公園には、毎日、日本の各地や世界中の国々から折り鶴が届けられます。その折り鶴を見ると、言葉、文化、宗教を越え、多くの人々が、平和への願いでつながっていることがわかり元気が出ます。

私たちは、戦争も核兵器もない世界が実現し、子どもたちが平和であることに感謝の気持ちを込めて鶴を折る日が来るまで、被爆の悲惨さや平和の尊さを語り継ぎ、世界へ伝えていく努力を続けていくことを誓います。

平成16年(2004年)8月6日

こども代表 広島市立段原小学校6年 河田 早紀
広島市立亀山南小学校6年 百合野 光哉